
ショートショートすと〜り〜ず【 握 】

水瀬愁

注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

【小説名】

ショートショートすと〜り〜ず】 握】

【Nコード】

N7397C

【作者名】

水瀬愁

【あらすじ】

高校生の僕ら。ちよつとした先の未来すらも見ずに馬鹿げてははしゃいでいる。親や大人がなんと言おうと、それにもちゃんとした意味がある。一回しかない高校生活。そのときその瞬間にしか味わえない気持ちをちよつとでもたくさん知りたいてって意味が。確かに将来のことを考えるのも大切だ。でも、今を楽しく生きることがも精一杯な意味だと、僕は思うんだ。そんな風に先を見ることを拒んで、毎日と同じ通学路を毎日と同じ幼馴染の女の子とともに歩き、帰宅しようとしていたときの、ちよつとした不安。

幸せは、こんなにも壊れやすい。

普通の、飲食店が連なる街並。昨日と似たような景色をぼんやりと眺め、歩いていた。

車の通行量が多い。エンジン音が騒がしい。自分の足音が聞こえないほどに。

「宗二くんは歩くのはやいなあ。羨ましいのですよ〜」
おっとりとした女の子の声。その主へと振り返った。

少し長くなってきた髪を鬱陶しそうにするわけもなく、手提げカバンを両手で慎重に運んでいるその女の子が、ぶつぶつと不満を訴えるように褒め言葉を述べたのだ。

「みゆきこそ急げよ」

「ん〜……うささんが取れそうだから」

うささんというのは、カバンの取っ手の付け根に縫い付けられたうさぎのマスコットのことだろうか。

たしかに、立ち止まった僕へとゆっくり歩み寄ってくるみゆきの動きに乗って凄いくらいに揺れている。

さつさと取っておけばいいのに………みゆきの考えはときに理解できないほどに馬鹿らしいから何も言わないでおく。

きつと『乱暴に取ったらうささんが痛そう』とか思ってるんだろ
うせ。

でもまあそんなところも可愛いというかなんというか。
早足にならない程度でみゆきが追いつくよりも早く、再び歩き出す。

車がぶんぶん飛ばして といっても高速道路とかに比べると遅いほうなんだろうけど 過ぎていく中、その向こう側にある街並

を眺めてみた。

薬屋や散髪屋。張り紙が窓に敷き詰められた 不動産屋。

よくは知らないけど、図面とかが書いてある紙をみて決められるんだよな。

今はまだまだ先のこと……って感じるけど、いつかはお世話になるのかな。

一人暮らしのアパートか、それとも、好きな人といっしょに住む一戸建か。

好きな人ってのはやっぱり大好きな人で、いっしょにいたいって思える人のことだよな。

そんな当たり前のことをなんで自分は確認しようとしてるのか。

交差点の前で、信号を見ることなく、反射的に止まる。

そして、みゆきへと振り返ろうとして 予想よりもやくみゆきが視界に入り、出て行った。

振り返ろうとした僕は視界が移動していて、みゆきが予想よりもがんばって早く歩いて横ほどにいたのだろうか。

突発的に顔をもどすと、みゆきの姿があった。

信号は赤なのに、それに気づいていないようで、じつとうさぎのマスコットを見ている。

このままだとずっと歩いていそうだ。

いつものことだ、と思って、道路にはみ出るってことに何の危機感も焦りもおぼえずにゆっくりと片手を伸ばし、叱るつもりもあって半端強引に引っ張り戻した。

「あっ」

そのときの拍子でうさぎのマスコットがカバンから離れて、道路へと舞い弾かれてしまう。

ほつれた糸とかが、ウサギから泳ぐように伸びているのを見ながら。

やっぱりヤヴァイくらいに取れそうだったんじゃないかと、少

し痛そうに思えても取っちゃったほうがよかったんだとか、道路に落ちたほうが痛そうじゃないかとかしか、思っていなかった。

みゆきの思考でいえば『飛降り』くらいの危機に逢うんだろっような、可哀想なウサギだ。とか、ぼんやりと考えるくらいに緩んでいたんだ。

そのときだった。

髪が舞うほどの轟とともに、凄い速さで巨大な貨物自動車が過ぎていったのは。

一瞬だった。

一瞬で、さっきまで惚気ているようにも見えたウサギのマスクコックが、消えた。

どこに行つたのかわからない。少し視線を動かすけど、どこにもあの姿はなかった。

あっけない。

言っちゃ悪いけど、夢か幻かと思うほどに一瞬で、実感がわかなかつた。

あのウサギがどこにもないことに再度頷いて、恐怖する。

あとすこし気づくのに遅れて、手が届かなかつたらと。

意味もなく、強い力で引き戻していなかつたらと。

そして あんなにもあっけなく、みゆきが動けなくなってしまったらと。

なぜかはわからないけど、曖昧でいて鮮明に浮かぶその構図。

血の水溜りの中に身を沈め、静かに、恐ろしいくらいな静けさをもつて、眠るみゆき

「……あゝあ、うささん。いなくなっちゃった」

あっけらかんとしたみゆきの声。

大切にしていたらうに、なんだよ、そのぼけぼけとした声はなぜか霧消に腹が立って、みゆきを睨もうとして。

「……………大切に、してたのにな。宗二くんの初めて買ってくれたうささん」

震えた声で呟かれたその一言に、僕は押し黙るしかなかった。

走馬灯つてのは脳裏を駆け巡るもんなんだな。

小さい頃。つていつてもそんな昔じゃない、買い物の仕方を理解できるくらいの年だ。

そんな小さい頃。僕は誕生日でもなんでもない普通の日にみゆきへプレゼントを贈ったんだ。

ほんといきなり。両親が仲が良い幼馴染つてやつだから、いっしょに出かけることもあつて……………デパートで母親が買物してるときくらいにパツと買ってパツと渡した。色気も雰囲気も何も無い。

でも、好きつて気持ちは誰にも負けないくらいに持つていて、それに真正面から向かい合つていたあの頃の自分は、素晴らしいくらいに清々しい。

思えば、あの頃の自分のほうが大分素直だったんだな。今は……………どうだろう。

寂しそつ目を細めて、道路の虚空を見るみゆき。

カバンを握り締めるみゆきの両手を、そつと片手で包み込んだ。

「うささん二世買って帰るか。可愛いのいっしょに探そう」

「……………うささんは世界で一番可愛いマスコットだもん」

素晴らしいくらい偏見だ。この世には、あのウサギ以上に可愛いマスコットなんていくらでもいる。

でも……………あのウサギ以上に可愛がられてるマスコットはいない気がした。

僕も偏見組の仲間入りか。

「なら、うささんの名を継ぐに相応しいマスコットを探しにいこう」

「そのあとはラーメンおごつてね」

みゆきはカバンを片手に持ち替え、残る片手でしつかりと僕と繋がってくれる。

「了解。こつてりかさりかさ、どつちにする？」

「じつさり」

「……何それ」

「こつてりとあっさり超融合して生まれたとあってもおいしそうなお味」

「おいしそうになってことは食ったことないんだろっが」

「いやあ、なんというか……一人で食べる勇気がないみゆきでしたとわ」

「よし、じゃあ僕はこつてりラーメンを食べながらみゆきの勇姿を見届けることにするよ」

「宗二くんはひどいなあ。血も涙もないなあ」

いつもどおりの街並で。

いつもどおり、会話に花を咲かせ。

いつもどおりじゃない僕だけは。

いつもどおりの毎日にある、遥かなる恒久のような幸せを 噛

み締めていた。

少しだけ……今は、みゆきと繋がった手を、離したくなかった。

心配になって、手元へと視線を下す。

握り合った手は、しっかりとそこにあった

不幸は、圧倒的な恐怖をもって、幸せのなんたるかを人に想わせる。

(後書き)

文学って分野がわからないので今までも恋愛にしていたのですが、ほんのどころどうなんでしょうね？

ショートショートすと〜り〜ず【 握 】

広告募集中

小説関連広告に最適です。
出版社や印刷会社はもちろん、
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくは PDF 小説ネット広告募集をご覧ください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7397c/>

ショートショートすと〜り〜ず【 握 】

2009年7月1日21時18分発行